

『ふるさと岡崎』を考える～伝承の世界から学ぶ～

岡崎市立大門小学校
校長 野本欽也



1. はじめに

おはようございます。只今紹介にあずかりました野本です。本日は、このような機会を与えていただき、以前から私自身がずっと考えているテーマと同時に学校教育の中で子供たちにどういうものを授けて行こうかっていうところに今日の一つのテーマを設定をさせていただきました。レジュメの冒頭に書いておきましたけれども、「ふるさと」という部分を非常に意識をしている私自身の心の中に、「ふるさと」をどのようにイメージしていくのかなということの思いながら、やはりいつかは「ふるさと」というものから何を学んで、何をこれから活かしていこうかっていうところに非常に大きな役割を感じることがあります。やっぱり「ふるさと」というものはおふくろのイメージ、これが非常に強くなるんじゃないかなと思います。それから自分を見失った時にやっぱり自分自身が帰る場所、それが「ふるさと」であろうと、そういう部分を岡崎に当てはめると、どのように「ふるさと」というものが岡崎という部分でイメージされていくのかなということ非常に意識をして今までやってきました。それから私自身も学校の現場を預かる校長として幸いなことに長い間やらさせていただいております。その時に子供たちにやっぱり心に残る、子供たちにとって本当に愛する素晴らしい原点になるような学校づくりをするには何が必要なのかなということずっと考えて学校経営に当たってきました。そういう意味で今後のやっぱり子供たちにとって、心の原点になるような「ふるさとづくり」というものをこれから一つ一つ見直しをしていかなければいけないかなということ強く感じている一人であります。そういう部分で岡崎というものを見ていった場合に、今日の話の柱になる岡崎にはいくつかの祭りがあります。非常に多岐にわたっています。岡崎ほどいろんなものが見られるところには、あまり見られないと思います。その一端を後で紹介をさせていただきたいと思います。それからもうひとつは信仰という、子供たちにとっても我々にとっても心という部分で何かに縋るとか、何かを奉るとか、いろんな自然の驚異に対してどういうものを認めていくのかという部分で、信仰から見る「ふるさと」という点で2点目は考えていきたいなと思います。それからもう一つはモノ、今日のレジュメの中には民具というモノを少しあげておきました。全てのことを取り上げることはできませんけれども、民具それから旧額田町の中に残っている猪垣の部分、これは岡崎市の鶴巣町にも実際には残っております。ですから東部の岡崎市以外で言えば山間地に残っている猪垣の問題。それからもう一つ岡崎は全国的に見ても農村舞台が非常に多い地域です。そのことの一つの例として、大川神明宮農村舞台のことも少し後で触れさせて頂きたいなと思います。そういう3つの部分から見て、この「ふるさと」を今日のテーマからすると、子供たちにこのことから何を学ばせて、何を残していくのかということを中心に見ていきたいと考えています。

冒頭レジュメのところ書いておきました、滋賀県の例が象徴的な事例としてあげられています。滋賀県水口町では、死者が死の直前まで身につけていたシャツを竹の十字

に挿して、北向きに一週間庭に立てたと言います。これを「フルサト」と言っています。このような事例が全国にいくつか出てきています。死者の靈魂がふるさとの家を目印にあの世へと旅をするのだということが報告されている。これらの事例から見ると「ふるさと」というのが本当に帰っていく原点であろうということを思っています。ではそんなことを元に、「ふるさと岡崎」をどういう観点で見て、何を残して何をこれから施策として、教育としているんなものを残さなければいけないのかという点を、少し触れさせて頂きたいなと思います。

2. 祭りにみるふるさと

まず祭りにみるふるさとという点でいきますと、最初に田楽と田遊びということをおあげしておきました。その一番の顕著な例として見られるのが滝山寺の鬼祭りであろうかなということを思っています。この滝山寺の鬼祭りは田楽的な部分と田遊び、この二つが



滝山寺鬼祭り

集合しておるといって現在愛知県下で唯一残る修正会の火祭り、それから鬼祭りという部分で非常に貴重なものです。これにも子供たちもいろんな形で参加をしております。常磐中学校の生徒諸君は「鬼まつり」を基にした生徒会活動を展開し、土鈴づくりをしながら、その収益を福祉施設に寄付をしていく活動を長く続けています。

このような子供たちが地域に残る祭りというものから何を認め、そして何を学び、そこから何を発信をするのかということがかなり出ているものかなということを思っています。祭りのクライマックスでは、孫面が鏡餅を持って、抱きかかえられて欄干の上で五穀豊穡を象徴している場面が見られます。孫面が持っている鏡餅、これが五穀豊穡を非常に象徴する物であることが理解できます。滝山寺の鬼祭りにはですね、田遊び、東次郎、西次郎という長刀を持ってですね、東西の部分を持っていく、そういうような被い清める部分をしながら、その後ですね、コツボメと福太郎という田遊び、田打ちの所作だとか田植えの所作をするような演目が残されています。そしてそのクライマックスの部分で欄干を松明を持って走り込んでいくという勇壮な祭りです。ここに子供、それから厄年になった者、この役になった人達は精進潔斎をしながらこの祭りに臨んでいく状況が今も厳然と守られています。この祭りを支えている組織が、谷の衆という組織です。この言い方は、滝山寺の鬼祭りの中ではかなり出てきます。谷の衆、それから十二人衆、そういう部分で非常にこの祭りを支える組織がしっかりしているということと、もうひとつは年齢集団、子供それから厄男、厄年、男で言うと42歳の厄年ということをお勧め言われます。ちょっと話は余談になりますけれども、私自身父親が42歳の時に生まれた子供であります。42歳の生まれた子供は捨てなければいけないという、いわゆる捨て子の風習が一般的に行われていました。私は一旦捨てられた人間なんです。ですから私は何故こういうことに興味を持って学生時代からやってきたかということ、どうもそういうことも影響しているのかなと思っています。お前は捨てられたんだとよく言

われました。祭りを支える組織と同時に、年齢集団というものが非常にしっかりしていることが特色としてあげられます。また、そこには子供も参加し、それを地域のいろいろな方々がこの祭りを支えている姿が見られます。それが今、現実に非常に長い歴史を持ちながら未だに伝えられています。

伝えられているということの意味の深さをやはり考えていかなければいけないのかなと思っています。それからもう一つは、山中八幡宮のデデンガッサリという祭りです。1月3日午後2時から拝殿で行われております。また是非これも滝山寺の鬼祭りとはちょっと違った形を見せる田楽であると思います。戦前は旧暦の1月3日の夜に行われていました。太鼓を田に見立てて、田打ちから稲刈りまでを模した素朴な形態の田遊びが残っています。これは太鼓というものを中心に置いて、それを田んぼに見立てていく、非常に違った形での田遊びの形態が見られます。これは滝山寺の田遊びとはちょっと形態が違う部分が残っています。両者を比較して見ていただけると非常に面白いかないかということを思っています。1月3日、そして滝山寺の方が2月の第3土曜日に実施されています。それからもう一つ岡崎に悠紀齋田のお田植



夏山八幡宮火祭り



悠紀齋田お田植え祭り

え祭りが残っています。次に、仮面というもので、特徴のある夏山町、夏山八幡宮の火祭りであります。これも3人の厄年の男の人達が、人々を火を松明を持って追っかけていくというお祭りであります。そこに使われている獅子頭、この獅子頭、現在はこれは使われておりませんが、中世の記年銘が残っています。永禄元年(1558)という銘の入っている獅子頭があります。これも非常に古式ゆかしい彩色と同時に祭礼集団をきちっと持っております。この火に追っかけられると風邪をひかないというふうに言われます。ですからこの祭りには、こぞって火祭りに来るんじゃなくて、追っかけられに行くという言い方をこの夏山の方々は言っています。そして子供たちもこれに参加してきます。そういう部分で鬼にまつわる、火にまつわるというものが非常に貴重なものが岡崎には残っています。

もう一つ岡崎を象徴するものとして見られるのが山車祭りと作り物風流があげられます。現在岡崎市は山車を15台保有しています。能見町の神明宮の5月にあるお祭り、これが8台持っています。それから矢作町が素晴らしい山車を2台持っております。もう一つ何と櫻山町が5台持っています。これは組で持っております。これだけの山車を保有しているということは非



櫻山の山車

常にこう珍しい状況であります。岡崎の場合はからくり人形は搭載をしていません。能見町や矢作町では山車内や前で子供が手踊りを披露しています。これも子供たちがいろいろな形で参加をしています。実は岡崎で見られる手踊りの形態が東栄町本郷、花祭会館があるところなんですけれども、そこまでこの手踊りが広がりを示しています。山車の形態としてはですね、名古屋型、犬山型、知多型、この3種類に分かれております。だいたい知多型は内輪、輪っばが中に入っております。それから他の犬山型と名古屋型というのは外に輪っばが出ております。そういうところで見分けをしていただけると良いかなと思います。山車というのは「山」「車」と書く場面、それを山車と言います。また楽車だんじりとも言うわけですけれども、元来神を引き寄せるためのシメ山という部分で、神が目に付きやすいように松や杉の葉を出して行きます。それを車に乗せれば「山」「車」、山車というふうになっていったと言われております。時代が過ぎると単に神の目をひく依代を備えるだけではなくて、神の姿の偶像を依代として置くようになって行きます。それが依代、依巫としての人形という形に登場する始まりであったと言われております。従って、からくり人形が搭載をされているというのはかなりそういう形での変化要素で出てきたものであると考えられています。ですからからくりがあるから古いとか、新しいとかっていう問題ではなくて、そういう形で山車というものが変化をしてきたというところで見ただけだと良いかなと思います。そういう部分で見えていくと矢作の山車、元能見の山車、榎山の山車というのは非常に良い部分、きちっとしたものを備えていると思います。榎山の場合は組で持っています。この山車を新たに作り替えるというのは非常に大変な金額がかかったと言われております。それを敢えて組で持っていく、祭りにかかる意味も大きなものがあつたのかなということを思っています。

次に竿灯祭り、提灯をいろんな形に持って行列を組んでいく祭りが見られます。市場町とか、本宿、羽栗、舞木で見られる天王系の祭り、これは津島神社系の祭りの一つです。菅生神社の祭りも津島系のお祭りというふうに理解をしていただくと良いかなと思います。夏病み防止と虫送りの意味が含まれているというふうに伝えられております。大幡では天王さんの祭りというふうでこの提灯がずっと大きく飾っていくような祭りが現在も行われております。次に虫送りという部分で、岡崎にしか見られない祭りが実は現在も伝えられています。お田扇祭り、地元では扇さんという言い方をしています。江戸時代には、6つの地域で行われていた田扇ぎ祭りは、現在、堤通り手永、これは六ツ美地区とそれから山方手永と言って占部用水筋の地区、町名で言いますと坂左右ですとか下和田、野畑というところがそれに当てはまっています。この二地区のみ伝承されているのみです。行列を組みながら神輿を持ち、そして天照大神の大きな幟を立てながら、それぞれの田んぼの畦を歩いていくというやり方をしています。ここの祭りは、20年に1回廻ってきます。これは実は岡崎しか残っていない祭り行事です。何故岡崎に残ったのでしょうか。実は岡崎藩では、近世幕藩体制の支配区分の方法として、手永制度を設けました。岡崎藩を六つの手永に分けました。堤通り手永、これに属するのが六

ツ美地区と今、西尾市になっている西浅井、ここの20ヵ町村が堤通り手永ということで20年に一度ずつ廻っています。それからもう一つは山方手永の例です。ここの特徴として、田扇祭りの廻り番があげられます。坂左右町から出た御輿は、下和田町を飛ばして、野畑町にある鍬神社に到着しているんです。13年に一度ですけれども一つずつ町名を飛ばしています。ですから上の幟で見ますと、実は坂左右から出て次の野畑へ行くところであります。それで翌年には野畑から若松へ行き、それから若松から針崎、針崎から柱、柱から羽根、そして羽根から井内、そして下和田へ来るという形であります。だから13町あってもひとつひとつとばして行きます。こういう変則的な廻り順をしています。この扇さんの象徴として、まずは榊樽の存在があげられます。これは水分をすごく含ませて重くしないと豊作にならないという言い伝えがあって、大人二人で担ぐのがやっとぐらいの重さにするというのを伝えております。次に神輿の中には木の枝を、実は鍬に見立てたものがご神体として入れてあります。農民にとって一番鍬が大事ですから、木の枝を鍬に見立て願いをかけています。素朴な農民の願いがよくあらわれている祭りです。そして、岡崎藩の支配と農民の思いが結びついた独特の祭りとしても意味があります。

次に馬之頭とオマント。オマントというと高浜のオマントが有名でありますけれども、実は岡崎にもきちっとしたものが残っているんです。ただ、掛け馬をやらないだけあります。この飾り馬、これは本当に一度立派ですので見ていただくと良いと思います。馬が、神は馬に乗ってやってくると言います。素晴らしい御幣を作ってですね、馬を飾り立てて動きを取っています。岡崎の矢作川水系にはこの馬之頭がしっかりと残っています。「チャラボコダイコ」と囃子がセットで付いてくるものもあります。オマントに囃子がついて「チリカラ」とか「チャンチャンチャラボコ」とか「チャラボコ」「チャンチャンバラバラ」「チャンチャンボコ」っていう言い方が岡崎では良く言われています。この「チリカラ」とか「チャラボコ」系の囃子は豊田市足助町の方にも花車という形で、矢作川水系にきちっと残っています。

次に、旧岡崎市域では、消えてしまった行事が合併によってできた旧額田町に残っているものがあります。それは、事八日行事（おかた送り）という行事です。これは大代、雨山に伝承されているものです。大代のおかた送りは、毎年2月8日に行われています。これは子供たちが主役の行事であります。全国的に行われていた八日行事が現在岡崎にも残っているというひとつの事例であります。現在大代と雨山、雨山はおくり事という表現をしております。



大代町おかた送り

この二つの地域しか現在伝えられておりません。1965年代までは2月8日、これを事始めと。それから12月8日にも事納めというふうで以前は2回行われていました。現在は2月8日だけになっていきました。行事の主題はおかた送りの人形があります。お

殿様、これ判別ができない部分があるかもしれませんが、刀を差しているのはお殿様、それからお嫁様、それからお侍様、この三体を藁で作ってあります。今年の2月の段階ですけれども行って、作る場所からずっと見させていただきました。太鼓や鐘をたたきながら、村境まで行列を組んでいきます。村境に笹と三体（お殿様、お嫁様、お侍様）の藁人形を置いて帰ってきます。その際に絶対に後ろを振り向かないことというふうに言い伝えられています。その持っていくところはですね、村境の山の中に入っていけるんですけれども、雨山との村境、行者様の奉ってある鳥居下の道脇の所に置けます。置いたら絶対に振り向くなという言い伝えがあります。雨山の方は豊川市一宮町と岡崎市河原町に至る三ツ又のオカタバというところに置いて帰ってきます。絶対に振り向くなという言い伝えがあります。これはですね、村境まで送って行って自分の病気や災いが人形が肩代わりをしてくれるという言い伝えが今に生きていることを示すものです。その年の豊作と村人の健康を願っているというもので、それが子供主体で行事が残っているという部分、非常に貴重なものであるかなということを思っています。この事八日行事で、もう一つ紹介をさせていただきたいのは、新居の関で有名な静岡県の新居町に「チャンチャコチャン」と言って、大代、雨山と同じような行事が残っています。やっぱりそこにも事八日行事なんですけれども、振り向くなというような藁人形を作ったりというような形が出てきています。こういう子供の行事というものが本当にいろんな部分で消えてしまっている中でこれが現在岡崎市の中に残っているというものも大きなものかなということを思っています。

次に神楽ということで、千万町神楽を紹介しておきます。神楽には、大きく分けて里神楽、湯立神楽、それから獅子神楽、山車神楽、その他の5つに分けることができます。千万町に残っているのは、これ嫁獅子神楽の中で県内で一番長く受け継がれているものです。これは現在、県指定の無形民俗文化財ということになっています。御幣と鈴を持って舞い、幸せを引き寄せるものというふうで伝えられています。7人でこの獅子神楽の構成をしています。4月の第3日曜日に行われております。この千万町神楽が初めて文献の中に出てくるのが宝暦元年、1751年です。これは実際に江戸の中期、宝暦年間には書き付けの中に出て来ております。この千万町神楽ですけれども、一番私自身が興味関心を持っているのは、この舞方とか囃子方、これが7人でされ、舞が流れていきます。これが全て父子相伝という形で父親から子供に伝えられていく。これが千万町神楽の大きな特色であります。冒頭に言いました滝山寺の鬼祭りも12人衆、谷の衆という人達の組織がしっかりしているから現在まで残ってきている。千万町神楽も父親から子供に舞方、囃子方を伝えていくというこういうやり方が祭りという部分を存続していく大きな力となっています。これが今日本の教育、家庭の中では無くなっちゃったんだということを思っています。その事は後で少し触れさせていただこうかなと思っています。その他、花火、冒頭に言いましたように岡崎の場合は菅生祭りで花火が盛んなものがあります。オタメシ、花の塔というのも矢作の誓願寺でやられています。祭りだけを見て

も、もの凄く多岐に渡っています。その中でやっぱり伝えていくための要素がどこにあるかっていうところを明確にし、要素を引き出して、いろんな場面でこれから活かしていく必要があると思います。

3. 信仰から見るふるさと

信仰から見る「ふるさと」ということで、いくつか挙げておきましたけれども、時間という部分もありますので、少しまとめて話をさせていただきたいと思います。まず一つは地の神、これは土地の神ということで、岡崎市は地の神の分布が、東部から東三河にかけてもの凄く、それから静岡県、太平洋側の熱海、三島までは非常に濃厚に分布しております。地の神ということで自然石を使ったり、各家に土地の筆ごとに祀ったりしています。戌亥の方角、西北のところには必ず祀っています。そして、人が死んで50年経つと神になる、いわゆる仏から神になるといいます。それが地の神という形になってきます。ですから土地が2箇所持っているところだと別々な形で地の神を供えていくという、そのようなことも実際にやられている地域があります。かつては、濃厚に残存していた庚申講を紹介しておきます。庚申講は、60日毎に巡り来る干支の庚申の日に特殊なタブー、禁忌を要求する信仰なんですね。庚申の日には夜眠らずに過ごさなくてはならないと言われている。この徹夜を主庚申という言い方をして、日待ちの庚申であります。月待ちに対して日待ちの信仰のひとつであります。だから太陽が昇ってくるのを見て、それで今日体内には何も悪い虫が入らなかったな。これは奈良時代から実際に続けられているものであります。60日毎。これが現在やっぱり額田町にもきちっと沢山残っております。

次にオシャグチというのがあります。これは岡崎市で言うと51例確認できます。いろんな字を与えることができます。もの凄く沢山の当て字を持っています。これはよく喋る女の神様、よく喋る女の人をオシャグチさん、お喋りさんというような言い方もされているようです。いろんな境を守る神だというような表現もされておりますけれども、岡崎市の中で特異な例として、羽栗町のオシャグチさんがあげられます。昭和27年の棟札がこの中に入っています。これは安産の神ということで、以前は自宅でお産をすることが多かったですね。そこからこの羽栗町のオシャグチさんから自然石をひとつ借りてきて枕元に置いてお産をする。お産が終わったら無事に生まれましたということで、また川原からひとつ新しい丸石を捜して、その部分とひとつともうひとつ付け加えて置くと、こういうやり方をしている。ですからどんどんどんどん丸石が増えていくと。現在はこれはやられておりません。でもこの祠が未だにオシャグチさんということで信仰をされているというところもひとつ。それからもうひとつは切越に八面塔というのがあります。これも資料を見ると地の神の一種じゃないかというふうに言われています。切越八面塔というのもまあ一度見ていただくとこの自然石を本当にうまく積んであります。まだ、よく分からない神です。

4. モノから見るふるさと

モノから見るふるさとということで、民具でいろんなモノを見ていただきたいです。岡崎に残っているモノであります。これは半唐箕といえます。私が文部省の科学助成費

をもらって調査をした時に作手で採集した半唐箕の資料であります。この形態はですね、私自身設楽にしか残ってないというふうに思っていました。南下しても、作手までだろうというふうに思っていました。ところが何と先だて形埜小学校にある旧体育館の中の民具をずっと調べさせていただきました。そうしたらこの全く発見できなかった半唐箕が実は2台岡崎に残っていました。ですからこの設楽式半唐箕というものがこんなところまで下りてきているのかってということで紹介させていただきました。こういう唐箕というのはほとんどこの辺りでは見られてないと思います。雑穀などを本当に簡単な構造の4枚羽根でゴミを飛ばしていくようなものであります。これが実は額田、岡崎に残っていたというところで、これを元にもう少し出自と使用事例などを調べていかなければいけないなと思っています。それから額田の民具資料を見てもお茶に関する資料は、沢山残っています。それから山仕事に関する資料も沢山残っています。こういうものも一つ一つ見ていかなければいけないということを思っています。



半唐箕

次に芋洗い機というのがあります。これも山間部にしか見られないようなものであります。その長い棒を、小川の流にまかせてこの真ん中に、竹と木で編んだ滑車で回る物です。その中にじゃがいもとか里芋を入れていきます。朝入れておきますと昼過ぎには非常に綺麗に皮が剥けて出てきます。皮を剥く必要がないんです。これがやっぱり小川、水が豊富なところだとか、いろんな物を活かしたところの民具であります。こういうものが現実に残っています。

それから山間部の地域の独特なものとして猪垣があげられます。これは総延長60キロあります。これを何のために苦労して地元の人々が作っていったのか。猪の害から守っていくための方法として、猪垣を作ったことを、今の子どもたちに示してみました。電気で退治すればいいじゃないのか、というふうな考え方をするんですけども、私はこういうものを見させていながら先人たちの知恵と工夫とか、努力というものをもっともっと学んで欲しいなということを思っています。そこから冒頭に言いましたように大川神明宮農村舞台について述べたいと思います。大川大高味というところに、農村舞台が入母屋造りの茅葺の、高さ11メートル、奥行9メートル、間口10.9の大きな舞台があります。これは回り舞台です。こんな農村にこんな素晴らしい舞台が建っ



猪垣

ていること自体が驚きと初めて見た時、非常に感動しました。何でこういうところにこんな舞台ができあがるんだろうかと思いました。それから岡崎市をずっと歩いていると、各神社のところはかなり沢山の農村舞台が必ずあったんです。そのデータのある時に東京の恩師のところへ送りました。そうしたらこれだけの頻度で農村舞台があるというのは珍しいと、貴重だという指摘を受けました。だからこういう部分も一つ一つ見ていく必要があると強く感じました。私自身、いろんな祭りとか信仰とか、モノから子供たちに、やはり知恵と工夫という部分を残していつかあげて欲しいなということを思っ

ています。そして民具というのは、実際に自分で修正が出来ます。だから良いんです。今の子供たちはそういう経験がありません。正直言いましてインスタント文化っていう言葉が良く使われています。プラスチック製品が登場してきて一層拍車がかかり、ステンレス製のモノも多く出回るようになってきました。だから先に示したような民具のたぐいというのはどこかが壊れれば補修は可能であります。プラスチックだとかステンレスは壊れてしまったらそれを補修するのは大変であります。まあ瞬間接着剤とか何とかありますけれども、ほとんどそれでは修復が不可能です。それに対して、民具というものは、自分で修正、直すことができます。ですから今の子供たちはこういう部分の知恵と工夫というものをいろんな場面でもう少し繋げてやっていきたいなということを思っています。

5. 伝承の世界からの「学び」

それから今の子供たちを見ていますと、「勘」というもの、それから「コツ」というもの、それから「加減」、そういうものが本当に分からない子供たちが多いように思います。手加減それから火加減、先だっても山の学習へ子供たちを連れて行きました。飯ごうでご飯を炊かせます。なかなか水加減、火加減、これがなかなか難しいです。ですからおこげが多くなってしまったり、芯があるご飯が多かったです。今料理番組を見ている、大さじ何杯、何グラムとマニュアル化されています。以前はそんなことはせず、さじ加減などといって、自分の舌でみています。だから子供たちは喧嘩をすると手加減がないんです。だからカッターナイフを持たせるなというようなことも平気で出てきてしまいます。だから手作業をするとか、加減とかっていう部分を、学びとっていく場が必要となってきています。このように長く伝えられた伝承の世界の中から学ぶことは私は凄く沢山あるんじゃないかなと思っています。それをもっと学校現場やら行政のいろんな部分に活かしていくっていうことが本当に必要になってくるんじゃないかなと感じています。それからもう一つは、こういう部分を見てきますと人間関係、例えば祭りだとかいろんなものを見ていきますと、やはり縦社会の人間関係が良い意味での縦社会の人間が非常にしっかりしておったということでもあります。ですから滝山寺の鬼祭りも孫面をかぶる子供をどういう形で大人たちがサポートをしながらやっているのか、厄男たちがどういう動きをしているのかをしっかりと読み取り記録と広報に努めていかなければいけないと思っています。それから、大代の事八日行事、子供たちをどういう形でサポートしていくのかを綿密に記録し、後に伝えていく必要があると思います。その辺がやはり地域の中で子供たちをどういう形で見守っているんだよというところをもっともっというんな場面を出していかなきゃいけないのかな。今本当に子供たちの生活を見ていますと、学校の中でも縦社会の上学年が下学年に対してどういう動きを取っているのかってところがなかなか学校の中でも見えにくい部分があります。従って、この状況の中に生きるのが地域に残されている知恵と工夫を再生させることだと思えます。それからもうひとつは猪垣だとか、先ほど示した民具のように、非常にその風土というものをどういう形で残し、伝えて、そしてまたは守っていくのかということをもっと意識をして欲しいなということを思っています。また、自治体そのものが、そういうものをどういう形で残していくのが大事になってくると思えます。それから最後

のところちょっと書いておきましたけれども、伝承母体に対しての施策、地域の民俗をどのように位置付け、保護するのかをより明確にし、保護・伝承政策を打ち出していくことが必要になってくると思います。各種生涯学習の施策が地域の生活の中にどういふふうに影響を与えるのかが検討されなければ私はいけないんじゃないかなということを考えています。合併されて登場した新しい市町村が、民俗の伝承ごとに対して行うべきことと、行ってはいけないこと、これをきちっと判断をやっぱり市当局はして欲しいということを強調したい一人です。だから平成の合併というものが、私なんかに興味を持ってやっていることからすると合併をしたからこれでっていう部分に終わっていくんじゃないで、合併をすることによって、たとえそこの風土的な環境をどう残すのか、それから伝承母体であるムラに残されている民俗文化財をどのような形で保護していくのかという施策を明確にしていくことが急務であると思います。それから今後やっぱり子供たちに残していきたいものは何かというものをもっともっと見極めて私はやっていかなければいけないと思います。それがふるさと岡崎という部分をどういう形で発信をしていくのかっていうことと関連し、子供たちの心のふるさと形成にもつながると思います。それから、今来年の11月には図書館がオープンします。その中にむかし館という伝承の場が今計画されているようです。そういう場所で子供たちに体験の学習の場、伝承という部分で伝えられてきたものがなぜ今のこの世の中に中に残ってきているのかを、人の心を子供たちに伝えることが必要だと思っています。それが子供たちにとっての「ふるさと岡崎」というものをより鮮明に思い出すと同時に、これからの岡崎を考えるひとつの大きなヒントになるんじゃないかなということを考えています。私自身、子供たちに先人の知恵と工夫を伝える役割を今後とも確実に進めて行きたいと考えています。ありがとうございました。